



もとの名は「ボロジノ」?

—境界の島の呼称変遷を検証する—

境界に取り残されていた島

台風シーズンになると「南大東島」という名前をよく耳にします。この島の10キロ北隣にはもう一つ、「北大東島」という兄弟島があります。両島の南にはさらに、およそ170キロをへだてて「沖の大東島」があり、現在は3島あわせて「大東諸島」とよばれています。

南・北大東島は、那覇からまっすぐ東へ360キロ飛ばせば1時間くらいで行けるのですが、途中で島影はまったく見えません。両島は数キロ沖に出ただけでまわり一面水深2000から4000メートル級の深海が広がるばかりという、太平洋に漂う文字通り絶海の孤島です。

「漂う」というのはけっして言葉のあやではありません。二つの島は4800万年前、フィリピン群島付近に誕生した典型的な隆起環礁として生成し、現在の位置まで移動してきました。そして高さ2000mの巨大柱のように海底からそびえ立ち、てっぺんだけを海中からちょっと突き出して、今でも毎年7センチの速度で北西方向に動いているのだそうです。

なにしろこの柱は全体が珊瑚礁の堆積物ですから、内部はまるで骨粗鬆症状態です。地表から2、3メートルももぐればいたるところに鍾乳洞の長いトンネルが延び、途中には海水がしみこんで出来た地底湖がいくつも見られます。島の周囲は環状に隆起し、水際はすべて、岩と化した珊瑚の残骸が絶壁をなしているのです。船で近づくのはまことに危険です。ですから4800万年間、最後の100年を除いては人が定住した形跡がまるっきりないのです。

今は南大東島の東西南北に一つずつ港が作られています。でもどの港が入港可能かは風向きしだいです。たとえ風の状態がよくても、船腹を棧橋にじかに接岸させる、普通の港でやっている方法は通用しません。一度強風に煽られると、船が致命的な損傷を受けるからです。そこでまず船体をワイヤーで3方向から固定します。荷物や人の積み込み積み卸しはその船の甲板に、船荷や乗客を鉄製の格子でかこんだケージにいちいち移し替えてクレーンで吊してやるのです。あらゆる生活物資の運搬も、他所へ行くのに船を使う人も、この不便は我慢しなくてはならないのです。



本格的な帆船が航行するようになる17世紀まで、太平洋に暮らす人々はおそらく島伝いに行き来していたと考えるのが妥当でしょう。大東諸島がながらくその存在を知られなかったのは無理もありません。かりに漂着者がいたとしても、『南大東村誌（改訂）』に伝説として紹介されているオランダ船の乗組員のように、飢え死にした35名の仲間たちの墓石を残し、自らは白骨と化したのと同様の、悲劇的運命をたどったにちがいません。難破船から島に打ち上げられた装具などから、17世紀末頃にはこのあたりをポルトガルやオランダの船が航行していただろうと推測されています。¹

¹ 南大東村誌集委員会編『南大東村誌（改訂）』、平成2年、南大東村役場、66頁。

『南大東村誌（改訂）』による島名考

大東島は歴史が浅いのに、過去 3 度も村誌を刊行しています。自分の祖先の来歴や、故郷の過去に起きた数々の出来事にたいする関心は、そこに暮らす人たちにとって最大の関心事でしょう。その一つである地名学も、じつはそういうアイデンティティ志向が学問的関心を獲得した結果生まれたものなのです。上述の『南大東村誌（改訂）』は、村制 40 周年をむかえた年に刊行されました。そこにはこの島がかつてどのように呼ばれていたかの記述があります。早いところでは「17 世紀はじめにヨーロッパで作成された色々な地図には Amsterdam という名の島が、ちょうど南・北大東島あたりに島が一つ記載されている」² とのことです。たしかに、付近を通り過ぎたときの角度や距離によっては一つの島にみえた可能性はあるでしょう。でもはたしてそれが本当に南・北大東島だったか、あるいはそのいずれかであったか、ということを示す証拠はないといわざるをえません。「アムステルダム島」は命名者も命名年も不明なのですが、わざわざオランダの都市名をつけたのですから、それはオランダ人か、オランダ船に雇われた人だったということだけはまちがいないでしょう。しかしそれ以上のことは詮索しても無駄だと思われまます。同時代の地図を見れば分かりますが、地図の正確さがあまりにもおそまつで、現存の島がそれにあたるかどうかなど、このことについての注記に示すとおり、判断することはとうてい期待できない代物なのですから。³

さて地元の人たち自身は、沖縄のはるか 90 里も先の東の洋上にぽつんと二つの島が浮かんでいることを知らなかったのでしょうか？ 村誌によれば、このあたりには「ウファガリシマ」という島があり、昔から沖縄の、とくに知念、佐敷方面の人々が昔から聖なる島としてあがめていたとされています。民間伝承は村の歴史を記述するさいには十分参考になりますが、残念ながらこの場合もそれが南・北大東島であるということを立証する手だてはありません。なぜかといいますと、これは「ニライカナイという神の国から、年に一度神が訪れて、人々に幸せをもたらすという信仰」⁴ の系譜につながる言い伝えであって、たとえば「蓬莱」とか「黄泉の国」のように、人々が「知っている」からといって、それだけでは実在証明にならないからです。

村誌はさらに、當濟 [とうすみ] という者が七人の乗組員とともに万年丸という船で無人島発見を企てて海に出た、ついに無人島に着いたものの着岸できなかつた、運悪く暴風雨にみまわれ琉球国に漂着した、この無人島は「方角、漂流方向からして大東島であるとされ」⁵ たという「大東島探検」のエピソードを紹介しています。これは文政三年(1808)という江戸時代末期の出来事で、後に述べる、緯度経度を実測して公式に確認がなされる時までわずか 12 年というわりと新しい時代の「発見」です。惜しいことに、このとき発見された無人島は近代的な技術を用いた測量がなされていませんから、厳密には比較対照のしようがありません。ましてや信仰の対象であった「ウファガリシマ」との関係については、やはり立証不可能だといわざるをえないでしょう。

² 同書、64 頁。

³ 1655 年刊マルチャーニ「シナ帝国新図」にも、1657 刊デ・ウィット「大タターリア・モンゴル帝国・日本・中国新図」にも、南・北大東島とおぼしき位置に島が記載されている。しかし北東方向の太平洋上には現存しないはずの大きめの島が二つ、さらに房総半島の東隣にもかなり大きな島が二つ描かれている。そればかりか、沖縄島の大きさや形がまるで違っていることでもわかるとおり、17 世紀の地図をもとに特定の島の過去を論ずることは無意味である。秋月俊行著『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1999、58 頁、95 頁参照。

⁴ 前掲書、63 頁。

⁵ 同書、64 頁。

ただ考察してよいのは、「ウファガリシマ」の語源が「ウフ（大きい）」と「アガリ（東）」からなる合成語だということです。⁶ 村誌は「どのような理由で大東島と呼称されたのか、その経緯のほどは定かではないが、察するに、当時の大和支配による方言軽視の風潮が理由ではなかったらうか⁷と推定しています。しかし「当時」というのはいつなのか、ウファガリシマが大東島となったのは本当に「方言軽視の風潮」があったためかについては、慎重に検証する必要があります。ちなみに、言語学では一般的に、琉球語を日本語とは異なる独立した言語とみなしており、「方言」という言葉には自らを低める感じが残ります。

話をもとに戻しましょう。たとえば「当時」というのを北海道の開拓がはじまった時期とおなじころと考え、蝦夷地の地名と比較してみましょう。開拓使がおかれた「札幌」の名は、豊平川を指すとされるアイヌ語のサツ・ポロ（乾いた大きい）という地名に由来するという説が有力なようです。これに対して「旭川」は、忠別川を指すチュ・ペツ（波たつ川）という地名を誤ってチュツ・ペツ（日の川）と解して誤訳したためだといわれます。北海道の地名の圧倒的多数はこの二つのタイプの命名法によります。北海道の地名に限れば、「札幌」はアイヌ語を尊重した結果であり、「旭川」は軽視した証だ、などと判断できないことは明白です。では、琉球の場合はどうでしょうか。琉球王朝時代からの地名がどんどんヤマト言葉に翻訳され、むりやり漢字をあてはめられた例はどのくらいあるのでしょうか。古来の呼称と新しい「翻訳地名」との割合はどれくらいでしょうか。こういった沖縄の地名研究の成果を踏まえて慎重にかまえないと、「方言軽視の風潮ではないか」という説はいつまでたっても「仮説」とどまらざるをえないでしょう。

その意味では、南・北大東島が正式の呼称を得たのは、緯度経度を実測して公式に確認がなされた1820年ということになります。この島を観光で訪れますと、「ボロジノ」という言葉がかなり目に付きますが、じつは、それが当時広く使われていた海図に最初に採用された島名でした。南大東ガイドマップの裏には様々な観光関連団体、企業、施設名などが並んでいて、ダイビングの会社、釣具店、レンタカー・レンタルバイク店に「ボロジノ」という名が見えます。島の特産品である黒砂糖から作られたラム酒のラベルには、「COR COR, SOUTH BORODINO ISLAND」と書かれています。現在は四代目になるそうですが、民族楽器を弾きながらはりのある声で当地の創作民謡を聴かせてくれる少女たちの島唄ユニットは「ボロジノ娘」といいます。探せばまだまだあるようです。

村誌の冒頭部分のハイライトは「ボロジノ」という名前がなぜ付いたかについての解説です。その部分を読んでみましょう。



<…> 英国海軍水路誌や欧米製諸地図には、すべて南・北大東島はボロジノ諸島 (Borodino Island) <…> と記載されている。ボロジノ諸島という名称については、文政三年（一八二〇）ロシアの海軍佐官ポナフィディン (Ponafidin) が南北大東島を発見、その位置を北緯二五度五六分東経一三一度一五分とし、彼が指揮した艦名ボロジノに因んで命名したとされている。（編者注・前回発行した南大東村誌では、ポナフィディンについて英国海軍大尉と記載したが、その後得た資料によると、ロシアの海軍佐官となっている。明治三六年（一九〇三）小瀬佳太郎の大東島探検記事では、大尉ポナフィディンとだけ記載され、同人の国籍などについてはなんら記載されていない。ボロジノという名称からして、ロシアに関係してはいないかという疑問と、艦を指揮する者ということになると、佐官クラスの地位にある者ということなどから、正しくは、ロシアの海軍佐官と考えるべきであろう。また彼が指揮した艦名ボロジノについては、一八一二年ナポレオンが指揮するフランスの大軍と、これを迎え撃つロシア軍との間で激戦となったボロジノ村の地名に因んでの命名であったことが推察される）。

⁶ 同書、63頁。

⁷ 同上。

⁸ 同書、64-65頁。

村誌のこの部分を担当した執筆者は、限られた資料でよくここまで調べたと感心します。とくに編集注に見られる的確な推論には頭が下がります。しかし次の村誌編纂のことを考えて訂正すべき点を整理しておいたほうがよいと思います。まず Borodino Island は Borodino Islands とすべきでしょう。発見した島の位置を測定した際に記録された緯度経度がこの通りであったか、については後ほど見ることにしましょう。ポナフィディンとは、ザハル・イヴァノヴィチ・ポナフィデン（生年不詳〔一説には1786〕-1830）という人で、ボロジノ号の艦長となったときの位は「海軍中佐」です。また激戦地となった「ボロジノが原」には当時からボロジノ村以外にもセミョーフスカヤ村などいくつかの村落があったので、艦名は村の名前からではなく、戦場の名からとったものと考えべきでしょう。ちなみに現在の「ボロジノ村」は旧セミョーフスカヤ村なども含めた、合計 48 の集落からなる人口 3380 名の農村です。

「ボロジノ諸島」と名付けられたいきさつ

ここでふとした疑問が脳裏をよぎります。オランダやポルトガル、あるいは太平洋を探検したキャプテン・クックの母国であるイギリス、あるいは捕鯨活動の盛んだったアメリカではなく、なぜロシアなのでしょう。しかも戦争でもないのに太平洋に軍艦が繰り出すというのはなんとも不可解です。

話は変わりますが、アラスカがもとはロシア領で、明治維新のころかなり安値でアメリカに売却されたという話はよく知られていると思います。アラスカには露米会社という、ラッコを主力商品とした毛皮交易や植民地経営をおもな事業目的とする会社が進出していて、その活動範囲がどんどん南下してアメリカ領にまで入り込み、サンフランシスコの北 90 キロの地点にまで達していました。その頃のアメリカはまだゴールド・ラッシュをむかえておらず、西部は辺境の地でした。そこへ活動の場を広げた露米会社の中心拠点は、アラスカの最南端、アメリカ大陸北西海岸のバラノフ島にできたノヴォ・アルハンゲリスク（旧名と現在名はシトカ）という町です。「ノヴォ」というのはロシア語で「新」を意味します。また「アルハンゲリスク」は北部ロシアの白海に現存する港町です。おそらく「北の港町」という類似点をもとに、ロシア人入植者が命名したのでしょう。この町の港にはカムチャトカのペトロパヴロフスク港はおろか、首都サンクト・ペテルブルグのクロンシュタット港からさえ、ホーン岬をまわる西ルートや喜望峰をまわる東ルートを通してロシア船が入港してきました。ちなみに「バラノフ島」の名は、露米会社に雇われ辣腕を振るった事業家で、ロシア領アラスカの初代総督にもなったアレクサンドル・バラノフに因んでつけられたものです。現在のアメリカの地図にも島名はそのまま引き継がれています。

バラノフは 1818 年にロシアへの帰途につくさなかに死にました。彼は民間人でしたが、もともと国策企業的性格が濃厚だった露米会社はこの年を境に、経営権がロシア海軍士官たちの手に移ります。露米会社に起きたこの時期の劇的な状況変化を研究した論考について、要約紹介しているある文献によれば、「1818 年に植民地統治者がバラノフから海軍中尉 (sic) のガゲメイステルに交代するが、これに伴い露米会社の性格に変化が生じる。〈…〉露米会社の事業の中心は毛皮捕獲から政治問題にシフトした。この背景には、ロシア領アメリカを軍事的に管理し保護しようとする、ロシア政府の方針の変化があった」のだそうです。⁹

⁹ 資料紹介：N.N. ボルボヴィティノフ編著『ロシア領アメリカの歴史：1732-1867 年』全 3 巻、モスクワ、国際関係出版、1997(vol.1)、1999(vol.2,3)（要約者：伊賀上菜穂、塩谷昌史、寺山恭輔）、「東北アジア研究 第 6 号」所収、東北大学東北アジア研究センター、2001、290-291 頁。ただし、ガゲメイステルは капитан-лейтенант であるから海軍中尉ではなく、海軍少佐である。

ユリウス暦をそのまま使っていたロシアの暦でいう 1820 年 8 月 20 日（現在多数の国で採用されているグレゴリウス暦では 9 月 1 日）、南・北大東島のすぐそばを露米会社所有のボロジノ号という排水量 600 トンの帆船が通過した背景には、北アメリカ大陸にまで領土を拡大した超大国ロシア帝国の、最東端の境界領域において生まれたこの状況の大変化があったのです。そうでなければ発見はもっと遅れていたでしょう。艦長は先にも述べたザハル・イヴァノヴィチ・ポナフィデンで、彼は 1816-1818 年にかけて露米会社の船舶「スヴォーロフ号」（艦名は 18 世紀末の著名な将軍に因む）で世界周航をやりとげた経験を有する航海者でした。

さて両大東島発見につながる（じつはもう一つ、その 4 日後に伊豆諸島の現「鳥島」を見つけ、ポナフィデン島と命名しています）航海の出発地は、今回も首都サンクト・ペテルブルグの前に広がるフィン湾の、ネヴァ河口近くに浮かぶクロンシュタット島の海軍基地港でした。日露戦争のとき日本帝国海軍と対馬沖で砲火をまじえたことで日本にもなじみの深いバルチック艦隊の本拠地でもありました。露歴 1819 年 9 月 29 日（現 10 月 11 日）に鉄製品、航海用具、索具などを積んで出帆したボロジノ号は、途中コペンハーゲンを経由してその年の 12 月 11 日（23 日）にリオデジャネイロに着きました。そこで船の修理や商取引などで時間を費やしたため、2月7日（19日）まで停泊することになります。そこから反転すると、今度は喜望峰を迂回してインド洋を横断し、5月10日（22日）にようやくジャワ島の北西岸の港に投錨することができました。つぎに錨を下ろしたのはフィリピンのマニラ港で、7月31日（8月12日）のことでした。赤痢と思われる疫病で多くの犠牲者を出しながらも、8月3日（15日）、ボロジノ号はいよいよ運命の出会いの待つ航海に出発します。¹⁰

その後の状況については、1821 年 1 月 26 日（2 月 7 日）ポナフィデン本人が露米会社の役員たちに詳しい報告書を提出していますので、両大東島発見にかかわる部分を訳出してみましょう。



¹⁰ <http://navy.su/puteshest/1803-1866/putesh50.html> これにはポナフィデンが лейтенант (海軍中尉) であったとか、大東島発見が 8 月 27 日だったとか、間違った情報も提供されているので注意が必要。

マニラから米国北西海岸へ向けて航行する途中、私たちは二つの発見をすることになりました。

昨年(1822)の8月20日、穏やかな北西風のもと、早曉まもない水平線にまだほの暗さが残るころ、推定12ないし15イタリアマイル[12~15キロ]¹¹先の真北方向に、低い砂地の島が発見されました。その西から東までの幅はおよそ10マイル[10キロ]でした。風向きがよかったので、近づいてみることにしました。島の緯度は正午の太陽の高さを数台の調整済みの機器を用いて艦の天測位置で測定し、経度には、マニラ滞在時に精度点検をして今日まで機器相互間の算定の作動差がほんの数秒しかないものを用いました。前者は北緯25°50'14"、後者はグリニッジから東経131°11'39"という結果でした。¹²

午後になって間もなく、同じ風のもとで島にそって航行を続けていたところ、そこから北北東方向に、最初によく似た島がもう一つ、12マイル(12キロ)ほどの位置関係で姿を見せました。両島間は海面がおだやかなところから、海峡の水深は深いものと判断します。

本船の本来の使命とは異なりますし、その時はこれらの島からほとんど真向かいに吹いてくる風も弱く、島の形そのものからして航海者にはなんら有益なものもたらさそうもなかったため、近くに留まることはいたしませんでした。測定は正確に、完全かつ成功裏になされたはずであると思いましたが、見るからに不毛と断定してよい砂上の丘陵や岬をこれらの島の近によってスケッチするためため航行を遅らせても、また水を確保できない島だと判断できることもあって、なんら益するところはないと考えました。2度にわたり船から100サーージェン¹³の段索に繋いだ鉛錘を投げ入れてそれらの島の方位測定をした際、海底には達せず、コンパスの傾きは両島から1°28'東寄りであると算定されました。新旧いずれの地図にも、またこの経度の海域を通った著名な航海者たちの航海記にも、このあたりには岸らしきものは毫も見いだせないで、これらの島はみな、あえて我ら自身の発見に帰してよいと考え、したがってこれらの島を艦名に因んでボロジノ諸島と命名しました。¹⁴

このあと、ポナフィデン島と名付けた鳥島発見についての記述が続きますが、割愛することにします。この航海は途中で一人が水死し、病気にかかって命を落とした船員が40人にもものぼるといふ悲惨なものでした。

「ボロジノ諸島」という島名の認定まで

これほどの犠牲をともなったポナフィデン海軍中佐の二つの発見はしかし、ただちに認定されたわけではありません。1822年12月1日(13日)、つまり報告から一年近くたってようやく海軍省の会議で、発見されたという島(この場合は「ポナフィデン島」)については確認が必要だとの決定がなされます。「ボロジノ諸島」についても同じように海軍省の決定がなされているはずですが、筆者はまだその資料を見つけてはおりません。ただ、1828年6月19日付けの、輸送船「クロトキイ号」の司令官で海軍少佐のガレメイステルという人物に出された訓令のなかに、付近を航行する際にはポナフィデンが1820年8月20日に発見したという二つの島と、同年8月24日に見つけたとされるもう一つの島について確認してくるようというくだりがありますので、¹⁵その時点ではまだ大東諸島は世界から認知されてはいなかったこととなります。8年後、海軍中佐に昇任していたガレメイステルはそれにこたえて、1830年5月2日(14日)に報告書を提出しています。しかしこの中には問題の島についての探索結果が書かれていないのです。¹⁶「大東諸島」のもとの名前の名付け親であったポナフィデンは1830年に亡くなっていますから、自分の偉業を認められることなく、むなしく他界したこととなります。

1963年6月21日に出版されたソ連製の海図には南大東島と北大東島が載っていて、そこにО-в а Б о р о д и н о (Я п.) (ボロジノ諸島[日本])と書かれています。つまりロシアの海洋関係者は現在、「ボロジノ諸島」という呼称で大東諸島を認知しているわけです。はたしていつの時点でポナフィデンの発見が正式に認知されたのかについては、今後の研究を待っていただかななくてはなりません。

(木村 崇、京都大学名誉教授、北大スラブ研究センター特別共同研究員)

¹¹ イタリアマイルとは別名ミリオ(miglio)ともいい、伝統的には1.489キロメートル、現在では1キロメートルにあたる。普通の1国際海里(international nautical mile)は1.852メートル。

¹² 『南大東村誌(改訂)』では、北緯25度56分東経131度15分としており、ポナフィデンの測定値とは若干の差がある。村誌の文脈から判断して、こちらは英国海軍水路誌に依拠しているからであろう。

¹³ 帝政ロシアの長さの単位で、1サーージェンは2.134メートル。

¹⁴ Российско-американская компания и изучение тихоокеанского севера 1815-1841, Сборник документов / отв. ред. Н.Н. Болховитин; Ин-т всеобщ. истории; Рос. гос. архив военно-морского флота. — М.: Наука, 2005. С. 103-104. ここに訳した「ボロジノ諸島」の原文は«Острова Бородинские»で、「ボロジノ」が形容詞になっている。

¹⁵ 同書、139頁。

¹⁶ 同書、222頁。